

『お隣さんは溺愛王子様（プリンス）』

著：若月京子

ill：明神 翼

高岡と話してからというもの、龍一はしばしば考え込む様子を見せるようになる。

食後のコーヒータイムや勉強の合間…二人で並んでテレビを見ているときなど、ふとした瞬間に遠い目をしている。

玲史はおそらく龍一の判断としてはやめたほうが良いと考えているのだろうが、やりたいという気持ちが消えなくて迷っているのではないかと思った。

そしてそれだけ迷うということは、やはり本気で剣道に打ち込みたい気持ちのほうが強いんじゃないかな…と考える。

ただ、そうなるといういろいろなことを犠牲にしないといけならしい。

ハーフで華やかな容姿とは違い、意外と堅実な性格をしている龍一の将来はだいたい決まっている。

できれば在学中に司法試験に受かり、母方の祖父の会社の法務部に入るとのことだ。もっとも司法試験はとても難しいから、入社してから挑戦してもいいらしい。

顧問をしている弁護士があと十年ほどで定年を迎えるから、その跡を継いでほしいと言われているのだった。

企業弁護士なら不特定多数の依頼人相手ではないし、一定の収入もある。女性たちが勝手にのぼせてトラブルになったりする龍一には、いい就職先である。

在学中になんとか司法試験に合格しようと勉強をしている龍一にとって、剣道に打ち込むかどうかは人生を左右しかねない大きな決断だった。

高岡と会った二日後になっても龍一の結論は出ず、二人は予定どおり映画館に向かった。

インターネットですでに席は予約してあるから、のんびりとしたものだ。

暑い暑いと言いながら炎天下を歩き、電車に乗って目当ての映画館に辿り着いた。

「はー…涼しい……」

「日本の夏は、本当に暑いよな。冷たい飲み物でも買うか」

「はい。……あ、あそこのドーナツを買ってきていいですか？好きなんですよ」

「ああ、俺も好きだ。旨いよなー」

龍一用に二つ、玲史用に一つ買って、ついでに飲み物も買う。

「しまったなー。ドーナツを食うんなら、コーヒーを持ってくればよかった」

二人ともアイスコーヒーを頼んだが、店を出てすぐに一口飲んだ龍一がそうぼやく。

「龍一さん、すっかりこだわりの人になってるからなあ。やっぱり、あんまり好みじゃないですか？」

「ああ。別にまずくはないが…うーん……」

「帰り、デパートに寄ってケーキを買っていきましようか？コーヒーに合いそうなやつ」

「そうだなー。せっかくだから、ちょっと贅沢にハムやチーズなんかも仕入れて…今度、ピザを生地から作ってみようと思うんだが、できるかな？」

「うっ…ふ、深まってる……。ついに、粉ものにまで手を伸ばすつもりですか？」

「楽しそうじゃないか。粉を練ったり、伸ばしたり。餃子を皮から手作りすると旨いって、テレビで

言ってたなー」

「じゃあ、まずは餃子でチャレンジしてみましようよ。ボクも手伝います。お父さんたちも好きだから、五十個くらい作らなきゃいけないかも」

「五十個じゃ足りないんじゃないか？ 俺、三十個は食うぞ」

「え……」

「どうせなら水餃子も作って…うん、旨そうだ」

玲史のは、手抜きできるところはしたい、毎日の主婦的料理法だ。しかし龍一はまさしく男の料理で、突き詰め、究めようとする。だからいずれ粉ものにも手を出すと思っていたが、予想よりも早かった。海老餃子も作ってみたいなどと言いながらロビーでドーナツを食べる。

あっという間に食べ終わり、上映時間を待ってのんびりしていると、「リュウちゃん」という声がかかった。

そちらのほうを見てみれば、女の子が二人いる。どちらも上品系の、可愛らしい子だ。化粧もおとなしめ、高校生くらいに見えた。

声をかけたのが左側の子なのは、龍一を見つめる表情で分かる。

嬉しさと切なさや憧れ…いろいろなものが混じった複雑な表情だった。

「絵里か……。久しぶりだな」

「本当に。—あの…あのときは、短気を起こしちゃってごめんなさい」

「いや、別に気にしていない」

「でも…私、子供だったから……。後悔しているの」

何やら意味深な言葉に玲史がどういう相手なのかと疑問を持つと、タイミングよく二人が見る映画のアナウンスが入る。

「もう、映画が始まるから。元気でな」

「待って！ リュウちゃん、私……」

切ない声と表情とで呼び止める絵里に、龍一は困惑を見せる。

「なんなんだ？ 俺は本当に気にしていないから、そっちも気にしなくていい。自分で決めたことだろう？」

「そうだけど…後悔してるんだもの」

「そんなこと俺に言われても困るんだが。時間が戻せない以上、後悔しても仕方ない。後悔を反省に変えて、次に生かせばいいんじゃないか？」

「次なんてないの。リュウちゃんにとって剣道が大切なのは分かっていたんだから、絵里が支えなくちゃいけなかったのに……。リュウちゃんのヒイおじい様が亡くなって、慰められたのは絵里だけだったのに……」

「いや、ちょっと待て。お前、何か勘違いしてないか？ 慰められるのはお前だけって…なんでだ？」

龍一が困惑してそう聞くと、絵里は泣きそうな顔で言う。

「だって、絵里だもの。絵里はリュウちゃんの特別でしょう？ 小さな頃からずっと一緒にいて、リュウちゃんのことを一番よく分かっているのは絵里だよ」

「いろいろと勘違いしてるようなんだが……」

必死な様子絵里と、困惑する龍一の温度差が大きい。どうにも噛み合わない会話に、龍一が溜め息を漏らして切り上げにかかった。

「とにかく、俺は気にしてないし、お前も気にするな。あと、俺の特別ってというのは誤解だ。映画が始まるから、行くぞ。じゃあな」

「リュウちゃん……」

まだ話したそうな絵里に背を向けて、龍一は入り口へと向かう。チケットを渡して上映ホールに入り、自分たちの座席を探した。

座って時計を見てみれば、まだ三分ほどあることにホッとする。

「あの…今の子って……」

「ああ、叶井絵里って言って、玲史の一歳下だ。小さな頃からの知り合いで、妹のような存在っていうところかな」

「妹…ですか？」

「ああ。同じ道場にも通っていたから、幼馴染みでもあるな。もともと思い込みの強いタイプではあったが、今も変わってないみたいだな」

「……」

龍一はそう言うが、絵里の態度を考えるとそれだけだとは思えない。龍一に向けられた切なそうな表情は、もっと深いかかわりがあったのではないかと思わせた。

龍一を見る絵里の目は、恋する女性のそれだった。

同じような女の子を大学で嫌というほどたくさん見ているから、疑う余地はない。

しかも絵里は龍一をリュウちゃんと呼び、二人の間には何かしらの絆と軋轢があったようだった。

それがなんなのか、玲史は気になって仕方ない。

必死さの漂う絵里とは違って龍一はこだわっていない様子だが、それでも玲史のやきもきはとまらなかつた。

もう少し詳しく話を聞きたい…と思って口を開きかけたところで、上映開始のベルが鳴る。

場内が暗くなり、ざわついていたのが静かになった。

話ができる状況ではない。玲史は聞くことを諦め、モヤモヤした気持ちを抱えながらスクリーンに視線を移した。

予告編が始まるが、まったく頭に入っていない。

（幼馴染み？ ただの、妹のような存在？ でもあの子は、どう見てもそれだけじゃない感じだったけど……。後悔って、何をそんなに後悔してるのかな……）

龍一はともかく、絵里の態度は明らかに恋愛のもつれという雰囲気だった。

龍一が戸惑う態度だっただけに、噛み合わなさや違和感が大きい。

（龍一さんは、妹のような存在って言ってたし…ウソじゃないよね。そんなことでウソをつく必要はないし……）

龍一の容姿とモテ方で、誰とも付き合ったことがないとは玲史も思わない。

もちろん以前の恋人と顔を合わせたくないし、話を聞きたいわけでもないが、こんなふうに偶然会ってしまったら、龍一は本当のことを教えてくれると思うのだ。

隠そうとすればかえって面倒になりかねないし、龍一は玲史に対して誠実に接してくれていたから、玲史も信頼していた。

けれどそれとは違うところで、絵里の態度に不安を覚える。

何しろ女性にモテすぎて、誤解させないためにも極力目を合わせないように、接触しないようにしている龍一である。

幼馴染みで妹扱いというのは、やはり特別扱いには違いない。

延々とそんなことを考え続けていたものだから、スクリーンを見ている話も頭の中に入っていない。

一応ストーリーは追っていたものの、楽しむとはほど遠い状態だった。

おかげで映画を見終わったあと、龍一に面白かったなーと言われても、曖昧に頷くしかできなかった。ランチのためにに入ったイタリアンの店でも、これといった感想がないから聞き役に徹することになる。旺盛な食欲で大盛りのパスタを食べていた龍一は、ふと自分の皿に視線を落として言う。

「……そういえば、生パスタも粉ものだな」

「粉ものですね」

「このモチモチ感、好きなんだよな〜」

「ボクは乾麺のほうがいいです。生パスタって美味しいけど、重いじゃないですか。全部食べきれなかったりするのがつらいんですよ」

「玲史は小食だから。おばさんのほうが食べるんじゃないか？」

「ああ、そうかも。医者は激務ですから。よく体力勝負だって言ってます」

両親ともに勤務医としてそこそこのポジションにいるらしいのに、子供が大きくなって手がかからないからと、進んで夜勤を引き受けている。子育て真っ最中の医師たちを、優先して昼勤務にしたいと言っていた。

いつ急患が来るか分からないので、食べられるときに食べるのが基本だ。

家で食べるときは普通だが、急いでいるときなどは驚異的な速さで食べてみせる。それに食い溜めしないと言って、大盛りのご飯を三膳食べることもあった。

玲史にとっては見慣れた姿だが、パワフルだな〜と感心してしまう。そして両親のそういったパワフルさは姉が継承していて、今はやりたい仕事についてバリバリ働いている。

世話焼きで面倒見のいい彼らに育てられたせいか、玲史はおとなしい子だった。気が弱いとは思わないが、自分から積極的に動く性格でもないと思っている。

店を出て、街をぶらつきながらデパートに向かう。

途中の薬局で湿布を特売していたので、剣道部の補充用に買い込んだ。

「安かったですねー。奈良崎先輩に、メールで報告しないと」

剣道部の先輩マネージャーである奈良崎が、備品の管理をしている。そして玲史もマネージャーとして活動している以上、だいたいのところは把握していた。

「夏の合宿で、大量に消費したからな。特に一年は、体中のあちこちに貼りまくってて、笑える姿だった」

「女の子たちも、ベタベタ貼ってましたもんね。すごく嫌だけど、痛くて動けない…って」

「大会でやる気が出て、合宿でハードなトレーニングをすると、そのあとの通常練習が楽に思えていいんだよ。次の大会の戦績アップに繋がる」

「ああ…次の大会は、九月でしたっけ。あと一カ月？」

「そうだな。九月に関東大会、それに勝ち抜くと十月の終わりに全国大会がある」

「関東大会と全国大会って、一月も間があるんですね。不思議」

「そうか？ 全国から選手が集まってくる以上、乗り物や宿の手配をしなくちゃいけないだろう。個人だけならともかく団体戦もあるんだから、一月はないと困るぞ」

「あ、なるほどー。そういえば、そうですね。全国大会は武道館だから、宿のことなんて考えませんでした。電車で三十分もかからないし」

「俺たちはな。飛行機の距離の連中にとっては、大遠征だ。試合なんて水ものだし、絶対に全国大会へ行ける保証なんて誰にもない。地方大会が終わったあと、ダッシュで予約を取る必要があるんだよ。大丈夫と予測して事前に予約を取っていたとしても、一月前ならホテルのキャンセル料がかからないしな」

「納得しました。確かに北海道や沖縄からなんて、普通に旅行ですよ。一週間後とかだったら、すごく困ります」

「そういうことだ。武道館でやってもらえるっていうのは、俺たちにとって本当に楽で助かるよな」

「はい。そういえば前の大会のときは大阪だったから、奈良崎さんがいろいろ手配してくれたんです。あれ、来年はボクの仕事になるのかな？」

「そうかもな。来年は奈良崎さんと玲史の二人だけか…もう一人、二人マネージャーが欲しいところだ」

「いっそ、ボクのと看みたいにスカウト制にしたらどうでしょう？ 剣道に興味があつて、運動には自信がない子って、探せばいる気がします。法学部の子たちに、ちょっと声をかけてみようかな～」

「いいかもしれない。鼻息の荒い自薦の連中は、露骨に俺目当てだからなあ」

そう言つて溜め息をつく龍一の表情は、実に苦々しい。

リアル王子様のような容姿でひっきりなしに女の子からのアプローチを受けていた龍一なので、その弊害もよく知っていた。

実際、こうして二人で歩いていても、あちこちから熱い視線が注がれている。

立ち止まって商品を眺めているとすぐに女性店員が飛んでくるし、立ち止まらなくても女の子に声をかけられたりする。

龍一はそのたびにビシッと拒絶してみせるが、積極的に声をかけてくるのは自分に自信のある女の子ばかりだから、その食い下がり方も鬱陶しいものがあった。

龍一が、出歩くのは面倒くさいという理由がよく分かる。

暑い季節ということもあつて、用があるときと朝か晩のランニング以外、龍一はあまり外出しようとしなかった。

一部の女の子たちには住んでいるマンションが知られてしまつていて、たまに周りをウロウロしているから嫌なのだ。

不審者が入れない、セキュリティーの厳しいマンションでよかつたと胸を撫で下ろしている状態である。

実家住まいのときは電話や押しかけも本当にひどくて、家人は辟易していたらしい。

近所の人たちは佐木さんの息子くんはイケメンだから…と寛大でいてくれても、迷惑をかけているのは間違いないので、家を出てきて正解だと笑っていた。

玲史もインドア派だから、家にこもつてばかりでも問題はない。

部屋の中ならくつついてられるし、日常の買い物や、たまのデートで充分すぎるほど満足していた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>